

1930 年の北京に暮らす日本人居留民たち

－「北方行」（1933-1936）を手掛かりに（上）－

宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター研究員 陳 佳 敏

はじめに 中島敦と中国北方

明治期、身分も職業も渡航目的も全く違って
いた数多くの日本人たちは、日本内地ではけっ
して実現できない数々の「夢」を抱えて中国大
陸に向かった¹。彼らの生活は、その厳しさ
とともに、豊かさの可能性が強調されて日本国内
でしばしば取り上げられた。そして、その「成
功物語」はやがて新たな「冒険者」の渡航を呼
び続け、また多くの国内の日本人に大陸での生
活に憧れを抱かせることになった。このような
時代背景の下で、1920年代になると、帝国日本
の大陸進出とともに成立された大正ツーリズム
によって、谷崎潤一郎、佐藤春夫、芥川龍之
介、村松梢風、阿部知二、横光利一などの文化
人が中国への憧れを持ってこぞって中国に旅行
し、様々な旅行記や文学作品を執筆したものが
新聞や雑誌に掲載された。こうした動きが、さ
らに多くの日本人の中国への憧れを呼び起こし
た。彼らは広大な中国大陸に夢や希望を託し、
自己実現を目指して新天地を求めた。あるもの
は1人で渡航し、あるものは家族を連れて向こ
うに飛び込んだ。そして、その中国憧憬を持つ
一人の中に中島敦がいた。

周知のように、中島敦は少年時代から朝鮮、
青年時代に中国、さらに晩年には南洋群島へ出
かけた。彼が朝鮮体験を通じて、中国や南方へ
の希求を募らせていったのは、まさに上述した
同時代における日本の外に抜けていく＜外部志

向＞があったからである²。しかし、彼の中国
大陸に抱いた憧憬と関心には、当時の一般日本
人が抱いたものよりさらに複雑な感情があっ
た。

中島敦は漢学名門育ちで、祖父や伯父たちか
ら中島敦へという血の流れで中国古典への愛好
が子供の頃から植えつけられていた。彼にとっ
て漢学の教養は、芥川龍之介、谷崎潤一郎、佐
藤春夫など明治期に育てられた他の日本の知識
人たちの中国の伝統文化や風景に対する親しみ
と関心のようなものとともに、「父親から血に
享け³」、また「母親の乳と一緒に飲んで育っ
た⁴」ものをも彼の精神と肉体の一部になって
いた。

一方、伝統中国のみならず、彼は現代中国に
対しても強い関心を持っている。彼の2番目の
伯父・斗南は30年間にわたり中国問題に傾倒
し、日本と中国の間に往来する一論客であり、
当時、欧米列強の利権獲得競争にさらされる
内憂外患の中国のことを『支那分割の運命』
（1912）として執筆した人物である。この伯父
の晩年は、中島敦の作品「斗南先生」（1933）
の中で詳しく描かれている。彼は、中島敦の下
宿に来るとよく二人で「支那の時局のこと。共
産主義のこと」などの話をしたり、また入院中
に毎日中国関係の新聞記事の中島敦に読ませたりした。

また、中島敦の7番目の叔父・比多吉は長年

1 劉建輝『魔都上海 日本知識人の「近代」体験』（筑摩書房、2010）186頁参照。

2 田中益三「遍歴・異郷－朝鮮・中国体験の意味」『中島敦 昭和作家のクロノトポス』（双文社出版、1992）30頁。

3 中村光夫「中島敦論」『中島敦全集別巻』（筑摩書房、2002）8頁。

4 同上、7頁。

中国旅順に滞在し、中国の政治に大きく関与する人間であり、満州国の建国にも関係のある、のちに満州国顧問に登った人である。中島敦はこの7番目の叔父一家との付き合いが多く、特にその娘の莊島ケイ子と親しかった。彼の中国行のほとんどは、この叔父に頼ったものである。行くたびに叔父の家に訪ねた中島敦は、生の中国情報や日本人居留民についていろいろ聞かれたに違いない。

そして、彼自身も父の大連第二中学校への転勤により毎年帰省し、旅行だけではなく、実際にその空間に生活したりもした。しかも1927年の帰省中、肋膜炎にかかり、満鉄病院に入院し、数多くの日本人の姿を観察することができ、それを断片「病気になる時のこと」、「ロシア人の名前」で描かれている。ここでは満鉄総裁の話、不景気の話などが聞かされ、また社員淘汰に不安を感じる様々な日本人を描き出している。

このように、中島敦にとって中国に暮らす日本人の生き様は、自らが注意深く観察できた中国の最も身近な現実だった。つまり、叔父達の意識的無意識的な伝授と自らの長年の体験によって、中島敦は当時の一般文人より、現代中国に対して一層複雑な感情と深い認識をしていたことが窺える。

すでに述べたように、当時の中国は日本国内の人々にとって、日本より自由な地平、別天地として映っていた。そのため、多くの人は中国に移住し、幸福な生活を念願していた。しかし、外地へ複雑な思いを抱いた中島敦は、大陸幻想が次々と作られていく日本国内の雰囲気違和感を覚えずにはいられなかった。

1932年8月、東京帝国大学3年生の中島敦は、叔父・比多吉を頼って、夏休みの時間を利用して旅順、大連などの南満州、および天津、北平（現在北京）などの中国北部を旅行

した⁵。そして、この旅行の産物として翌年の1933年、彼は北京を舞台とする人生初の長編小説「北方行」（1933-1936）の執筆に取り組んだ。1930年の激動期の北平を舞台にしたこの作品は、お互いに異なる民族と国籍を持つ人々に囲まれながら異国に生きる在留日本人の姿を描き出している。この作品を通して、日本国内の中国認識に違和感を覚える中島敦の葛藤が垣間見ることができる。

そこで本稿では、「北方行」に登場する地位、性別、職業も違う様々な在留日本人に対する分析を通して、在留日本人の側面を明らかにし、同時代作家における中島敦の北京認識の特異性の一端を明らかにしたい。

1. 1930年代前半の日本国内における北京認識

本節では、「北方行」の舞台になっている北京が日本人にとっていかなる場所であり、日本国内ではどのような北京認識を持っているかについて見ていく。1930年代当時、多くの日本人が中国に憧れていたことは前述した通りである。しかし、それは広い範囲での憧れではなくて、それぞれの都市にそれぞれ違う夢とイメージが託されたものである。例えば、一攫千金の野望を持つ人達は満州の新天地に向かい、自由な生活と「華洋雑居」のロマンに惹きつけられた人達は「魔都」上海に目を光らせた。また、異国情緒を夢見る人達は中国南方に足を踏んだ。そして、北京は東洋唯一の故郷として、特に多くの知識人や文人達は憧れた。

周知のように、北京は遼・金・元・明・清各朝の、名称を異にした都⁶として、約千年の歴史を持⁷っている。それ故に北京は、1910年代

5 川村湊「中島敦伝 第4回 北方彷徨」『アイ・フィール15（2）』（紀伊国屋書店総務部、2005）30頁。

6 契丹族の遼国は北京を「燕京」、女真族の金国は「中京」、また蒙古族の元朝は「大都」、そして漢民族の明朝は「北京」と称し、満州族の清朝もその名をした。

7 北川桃雄『古都北京』（中央公論美術出版、1969）10頁。

後半から何人かの宗教家やジャーナリスト達によって描かれている。

例えば、関和知『西隣遊記』（1918）と釈宗演『燕雲楚水 楞伽道人手記』（1918）は北京の建築の壮麗さに驚嘆し、懐古的な情緒に溢れる感情を表している。また、徳富蘇峰は『支那漫遊記』（1918）の中において古い建築が残された北京に感動し、明清時代を追憶し、さらに「巴里となりしにあらずや⁸」といった北京の町の新風景も発見した。さらに、東京高等商業学校東亜倶楽部の学生達が北京を観光した後に残された本の中では、北京のことを「形勢雄大⁹」「神秘的、懐かしみ¹⁰」「我を忘れざるを得なかった¹¹」と描かれている。

つまり、1910年代の北京を見ていた人はまさに北京の歴史的な趣味に目を向けたと言える。しかし、その時の北京はまだ一般の日本人によって知られていなかったことも事実である。

そして、1920年代になると、上述した大正ツーリズムの影響で、様々な北京案内や北京案内記が出版された。例えば、脇川壽泉『北京名所案内』（壽泉堂、1921）、上野大忠『天津・北京案内』（日華公論社、1922）、丸山昏迷『北京』（丸山幸一郎、1923）と中野江漢『北京繁昌記』（1922）などがそれである。そのほか、多くの知識人や文人達も北京へ旅立ち、北京への印象や思いが旅行記や文学作品によって多くの人の目に届くようになった。その中で、特に日本人の北京印象の形成に影響を与えたのは、芥川龍之介の旅行記「北京日記抄」（1925）をはじめとする彼の北京認識だった。

芥川龍之介は1921年、大阪毎日新聞社に派遣されて中国視察旅行に旅立った。彼は北京で約1ヶ月間滞在した。この短期滞在によって彼は

すっかり北京に魅了された。上海の「騒がしく」「ソワソワ」した雰囲気に対して、北京は「落ち着き」があり、「大陸の気分」がし、「何千年の昔からの文明」¹²が沈殿する場であると彼は認識した。北京を離れる直前に、彼は北京への思いを、ある雑誌のインタビューで次のように打ち明けている。

私は支那を南から北へ旅行して廻った中で北京程気に入った処はありません。それが為に約一カ月も滞在しましたが、実に居心地の好い土地でした。城壁へ上って見ると幾個もの城門が青々とした白楊やアカシヤの街樹の中へ段々と織り出されたように見えます。処々にネムの花が咲いて居るのも好いものですが殊に城外の広野を駱駝が走って居る有様などは何んとも言えない感が湧いて来ます¹³。

ここでは、芥川龍之介は北京の穏やかで快い風景を見出し、その限らない愛着が窺える。そして、その思いはその後も持ち続けていた。つまり、彼は北京の風景と雰囲気に惚れ込み、近代化の影響を受けず、政治動乱も離れた静々と悠然とした、心の安らぎの場所として認識したのである。

この芥川龍之介の北京認識は、実にその後の多くの知識人や文人達に影響し、30年代になっても変わらない。例えば、阿部知二の目に映った北京は「去日の美女」の面影¹⁴として映され、林語堂は「長く培われてきた穏やかな古い支那の魂を代表する」所、また「文化的慰安」と「田舎風の生活の最大限の美」¹⁵が調和され

8 徳富蘇峰『大正中国見聞録集成「支那漫遊記」第8巻』（ゆまに書房、1999）95頁。

9 東京高等商業学校東亜倶楽部『大正中国見聞録集成「中華三千里」』（ゆまに書房、1999）215頁。

10 同上、221頁。

11 同上、206頁。

12 芥川龍之介『芥川龍之介全集8』（岩波書店、1996）3-4頁。

13 同上、4-5頁。

14 阿部知二『北京』（第一書房、1938）278頁。

15 林語堂「古都北平」『改造』『支那事変増刊号』1937年11月付。

た所として感受し、さらに一戸務の『現代支那の文化と芸術』の中には「東洋に残された唯一の文化都市¹⁶」と「静寂無韻の文化発祥地¹⁷」として描かれていた。

このように、1920年代、30年代の知識人が認識した北京は歴史的で、文化的で、静々な風景と雰囲気を持つ安らぎの場だった。問題は、これらの作品には北京に生きる人々の動きや描写がほとんど見られないことだ。つまり、当時の知識人や文人達は北京を観光的な目線で見えていなかったのである。

ところが、中島敦の「北方行」は違っていた。彼は北京の都市風景を描いただけではなく、その空間に生きるさまざまな人間のあり方も描き出していたのである。次節では、その違いを明らかにするための手順として、まず作品のあらすじと先行研究を整理する。

2. 「北方行」のあらすじと先行研究

ここでは、分析に先立って「北方行」のあらすじを紹介する。全5篇から構成されたこの作品は、日本人大学生黒木三造（以下、三造）が行う北平行の旅から全ての物語が展開されるため、三造の北京での生活ぶりに焦点を当てて見てみる。

まず、作品の舞台は1930年9月の北平である。当時の中国国内は中原大戦という複雑な内戦状態下にあり、蒋介石の政権と反蒋政権との争いや共産党の蜂起など、新しい中国を作るために国民革命が勃発する時期であった。「北方行」の物語はこのような時代背景の中で展開されていく。

作品の冒頭では、三造の船上での姿が描かれている。21歳の三造は常に他人によって決められた既定概念に従いながら、先入観を持って周

囲をみる人物であり、客観的に現実世界と向き合って観察することができない人物である。そのため、彼は自ら「生とは何か」を真剣に考え、自意識過剰に苦しみ、現在の生活に不安と焦燥を感じている。このような生活に疲れ、そこからの脱出に苛立っていた彼は、新しい未知の環境に自分を投出して冒険し、そして「何か起こるに違い無い」という期待とも予感とも持ちながら大陸へ向かう船に乗ったわけである。船上では、彼は例の自分の存在理由と文学や芸術について思索しながら時間を過ごす。そして、その思索が妨害されたのは彼の日本語の教え子であるイギリス海軍軍人トムソンである。トムソンは仕事のために三造と同船で天津に向かっているところである。三造はトムソンとの関係について考え、トムソンが持っている日本人に対する優越感と差別、また自分が持っている西洋人に対する劣等感と敵対感を思い浮かべる。

その後、三造は北平へ到着し従姉の白夫人の邸宅に落ち着く。白夫人は20年前に、自分の家に下宿していたある中国人富豪の息子である白雄文と結婚して中国に渡った人物である。8年前に夫に先立たれたため、現在彼女は夫の財産を相続して3人の子供を育てながら北平に暮らしている。三造は北平に10日間ほど滞在したが、その最初の一週間はほとんど白邸を中心に動き、これまでの生活と切り離して快い無為な生活を送った。

そして一週間後、白夫人は息子の誕生日パーティー兼三造の歓迎会を邸宅で開いた。この祝宴は白夫人一家だけではなく、北平に居留するほかの日本人や日中混血児、そしてこれらの日本人の周りを囲む中国人、朝鮮人、西洋人など登場し、多様な民族と国籍を持つ人物たちが一堂に会する催しであった。三造もこの祝宴をきっかけとして、北平に生活する様々な在留日本人に出会い、彼らの生活を見つめた。

16 一戸務『現代支那の文化と芸術』（松山房、1939）26頁。

17 同上、34頁。

その中で、彼が興味を持つ一人は折毛伝吉という留学生である。25歳の伝吉はかつて東京で中学校を卒業した後、中国にいる伯父の保護で上海に渡り東亜同文書院に通うが、途中で退学し日本人ダンサーと同棲するなど頹廃した生活を送った。それが原因で伯父と喧嘩した彼は2年前に上海から北京へと漂泊してきた。現在彼は白夫人の保護を受けながら大学に通う一方、彼女の情夫でもあり、しかもその娘とも肉体関係を持っている。この伝吉の誘いで、三造は支那人ばかりの公寓に入り、伝吉の隣の部屋に引っ越ししてきて下宿生活が始まる。

下宿生活は極めて長閑な生活であった。三造は伝吉と様々な交流をするほかに、昼間はほとんど支那服を着て同公寓の中国人たちと北平の街散策をする。そして夜は決まって八大胡同で芸者遊びをし、行かない時は公寓で無駄話をする。このような生活を送っていたある日、三造は伝吉から友人の朝鮮人権泰生が2、3日中に鄭州の戦線へ出発する話を聞く。三造は今の無力的な幸福に酔いしれているよりいい刺激になるだろうと思い、戦場へ向かう決意を示す。しかし、その決意を示した後、なんの行動も見せないまま作品は中断される。

以上、「北方行」のあらすじを三造の目線から紹介した。この作品は、所々に脱字があり、またその一部が欠落していて、そして第5篇以後の作品の展開は未知であるため、多くの論者から未完と指摘されている。しかし、あらすじで確認したように、この作品は三造という語り手を通して、白夫人や伝吉を始め実に様々な北平に居留する日本人の有様と彼らの周辺に取り巻く多様な環境が描き出されている。それを手掛かりとして、1930年代の北京がいかなる都市であったか、またその空間に生きる在留日本人がなぜ北平に行き、そこでどんな生活を送っていたか、などを浮き彫りにするには十分な価値をもっていると思われる。

これまで「北方行」に関する先行研究では、二つの方面から議論されてきた。一つは作品が未完でありながら、「狼疾記」「カメレオン日記」という作品や、中、後期作品を生む母胎としての特徴が読み取れ、中島敦文学を理解するにあたって大きな意味を持っているという点である。濱川勝彦は「北方行」から『過去帳』への作業は、「『虚構』を捨て、作者自身の『主体的世界』を表現しようとした過程であって、そして以後の傑作は、このような形而上学な懊悩を歴史上の人物や過去の虚構の中に生まれた¹⁸⁾」と指摘している。また、ちくま文庫版『中島敦全集3』に収められている勝又浩の「解題」では、作品の内容とその後の作品に与えた影響が言及されており、「北方行」がその後の中島敦文学を生み出す一種の母胎的な役割を果たしている¹⁹⁾と主張している。さらに、平林文雄も「北方行」と『過去帳』との比較を通して、「北方行」から『過去帳』への脱出によって、中島敦の以後の作品は「第三者を中心とする客観的な手法」で自己分析や自己執着を描き続けた²⁰⁾と指摘している。以上の先行研究は、作品に見られる主要登場人物の姿が作者の分身や投影として見る傾向があり、また彼らの悩みもそのまま作者自身の悩みの表出として受け取り、登場人物をそれぞれ個性のある一人の日本人としての見方がほとんどない。

もう一つは、中国近代史の激動期を背景に、様々な民族と国籍の人物を造形して現代長編小説に挑戦することは、日本の近代文学史において稀な存在であり、価値のある作品だと評価している点である。渡辺一民はその著書『中島敦

18 濱川勝彦「『虎狩』まで」『中島敦の作品研究』（明治書院、1976）54-56頁。

19 勝又浩「解題」『中島敦全集3』（筑摩書房、2002）480-481頁。

20 平林文「中島敦『北方行』の研究—その成立と構成と撤退—「ノート第一」と『北方行』と『狼疾記』—」『高崎商科大学紀要（27）』（高崎商科大学、2012）174頁。

論』（みすず書房、2005）の中で「南京の国民政府と華北軍閥との対立・抗争を背景に戦争から革命まで包摂し、様々な異文化が交錯する北平に焦点を絞った、裾野の広い、ユニークな国際冒険小説が生まれたかもしれない」とし、「その完成の暁には、（略）全く新しいロマンとして、近代日本の文学の地平をさらに広げるだろうことは十分予測できる²¹」と指摘している。川村湊も「現代的歴史、中国の近現代、その中に主人公が入り込んでいろいろ行動し、その分身のような副主人公の男もいる。それを通して当時の現代中国を描こうとした²²」と指摘し、国際現代小説としての可能性を主張している。しかし、それらの指摘もいずれ作品に埋め込まれた中原大戦を背景とした中国現代史の膨大さ、また登場人物の国際性に焦点を当てており、現代中国に生きた日本居留民の視点には目を向けていない。

つまり、上述した先行研究からわかるように、「北方行」は中島敦文学や日本近代文学史に与える意義を浮き彫りにしているものであって、当時の中国に生きる日本人の視点を通して中国認識を深めようとした中島敦の意図についてはほとんど考察されていないということだ。

前述したように、中島敦はその家族や親戚類が長年中国に滞在しており、彼自身も旅行や帰省などの形で度々中国に渡っていたため、そこに居留する日本人たちを身近に観察することができる環境に恵まれていた。「北方行」はまさに中島敦の在留日本人たちへの認識とそれに伴う中国理解を理解する上でなくてはならない作品である。三造が期待を持って渡った北京は一体どのような空間であり、そこにはどのような在留日本人が暮らしているのか。第3節と第4

節では、これまでの先行研究を踏まえながら、上流社会に暮らす白夫人と一般留学生の折毛伝吉に焦点を当てて、1930年代に北京に暮らした
在留日本人の姿を浮き彫りにする。

3. 上流社会の白夫人

本節では、20年間以上に北京の上流社会に暮らしている三造の従妹である白夫人と彼女の周辺にいる様々な在留日本人について考察する。20年前、白夫人は東京の小石川の高台に家族と一緒に平穏に暮らす女学校の学生だった。ところが、彼女の家に私立大学に通うある中国人富豪の息子である白雄文が下宿しはじめた。

周知のように、中国人の日本留学は1896年に13名の公的派遣から始まり、1905年に8000名、1906年には12000名などピークを迎え、1910年までの中国では、第一次日本留学ブームを巻き起こった²³。彼らは近代化運動に乗り出し、近代化に急激な成功を遂げた日本に多大な関心を持ち、留学を通して日本の政治、経済、軍事、文化、思想など諸方面にわたって習い始めた。たくさんの留学生は、革命の道を歩み、また日本で新聞と雑誌を創刊したり書籍を翻訳したりして新文化と新思想を宣伝した。その中には、東京で中国同盟会を組織した革命家の孫文、変法運動のリーダーであった梁啓超、中国近代文学の父となる魯迅など、のちに中国をリードする多くのエリートが含まれていた²⁴。日本は衰えた中国にとって新時代の揺りかごであった²⁵。白夫人の家に下宿した白雄文は、まさにこのような日本留学ブームの中で来日し、新時代の声に感化されていた留学生の一人であった。

当時の日本では、多くの中国人留学生を引き

21 渡辺一民『〈他者〉としての朝鮮 文学的考察』（岩波書店、2003）45-46頁参照。

22 川村湊「帝国に抗する力を表現した作家」『中島敦生誕100年、永遠に越境する文学』（河出書房新社、2009）3頁。

23 王玉珊「中国人日本留学の歴史問題について」『中央学院大学社会システム研究所紀要10（2）』（中央学院大学社会システム研究所、2010）101頁。

24 菊池秀明『ラストエンペラーと近代中国 清末中華民国』（株式会社精興社、2005）130頁。

25 同上、130頁—131頁。

受けるということは、人道的な立場に立って「清国獨立」「日清提携」²⁶のためであると宣伝された。しかし、実際当時の駐華公使矢野文雄は、外務大臣西徳二郎に出した手紙の中では、その目的について「我国ノ感化ヲウケタル新人才ヲ老帝国内ニ散布スルハ、後来我勢力ヲ東亜大陸ニ樹植スルノ長計ナルベキトノ次第」²⁷であると述べたように、日本の国益や「大陸進出」、さらに中国の日本への従属化の野心に繋がっていた。日露戦争に勝利を遂げた日本は、清朝のことを「東洋の病人」と見下し、そして一般の日本人まで中国人留学生たちに対して傲慢な態度をとった²⁸。そもそも「小国」として中国に軽視された日本の立場は逆転した。

この日露戦争以後、日本の中国への優越意識と軽蔑が深く植え付けられたわけである。白夫人、つまり前川柳子も最初は、白雄文に対して「支那人、間が抜けている」と言い、当時多くの日本人が持つ一般的な中国人への偏見と軽視から逃れなかった。

しかし、その後2年の歳月が流れた時に、二人の関係は恋人同士へと発展していき、彼女は彼に対して「性急に燃えるような愛」、彼もまた彼女に対して「穏やかな寛容の愛」を抱くようになった。キリスト教の家庭で生まれ育った柳子は白氏と付き合い初めて間もない頃に、彼に聖書を買って渡し、教会に連れて行き、そして洗礼も受けさせた。そして、彼女の白氏に抱いた感情や思いを作品の中で次のように描いている。

この善良な男を助け、慰めを与え、毅然として世に立たせてやることより外、自分のこの世に生まれた意義はないのだ

と感じた。（初めから彼女は、白氏に頼る気持ちより、白氏を悪から「基督教的見地よりの悪から」庇ってやろうとする気持ちの方が強かった）そして白氏のすることはなんでも、その日本語の不自由ささえも彼女に限りない愛憐の気持ちを起こさせるのであった²⁹。

この文章からは白雄文に日本語を教え、彼をキリスト教的な悪から庇い、助け、そして世に立たせてやるという柳子の真摯の思いが窺える。白雄文も柳子の情熱な指導に抵抗することなくすべての事に内気で受け、彼女の愛を呼応していた。

その後、白雄文が卒業する年に、柳子は父親に結婚の許しを乞うたが、父や親族達の強い反対を受けた。その反対に対して、柳子は「愛には国籍がない」と意気揚々と説いた。クリスチャンだった柳子は、ほかの中国人に対して差別を持つ一般の日本人たちの見方とは違い、自分が心から白雄文を愛することと同じように、ほかの中国人に対しても平等に扱い、国籍と国家の違いが超えられると深く信じていたに違いない。そのため、半年間紛糾があっても、彼女の気持ちは一度も動かなかった。半年後、彼女のこの情熱と白雄文の財産がものをいい、つい二人はすべての反対を押し切って結婚を遂げた。そして、彼女は毅然として中国国籍を取り、旦那に付いて北京に渡った。

3-1 華やかな世界に暮らす

さて、結婚後の二人は北京の白附馬大街にある邸宅で生活していた。この邸宅は何棟に分かれていて、寝室棟の他に、宴会を開くことが好きな白夫人のために宴会場も設け、さらに棟と棟の間かなりの広さの庭を作り、日本風の泉などが拵えられていると描かれている。その描

26 上田万年「清国留学生に就きて」『太陽第4巻第17号』（博文館、1898）10-15頁。

27 外務省外交資料館「在本邦清国留学生関係雑纂」。

28 菊池秀明、前掲書（註24）136頁。

29 中島敦『中島敦全集3』（筑摩書房、2001）135・136頁。（以下頁のみ）

写から彼女の生活ぶりが想像できる。8年前に夫が亡くなった後も、白夫人は夫の財産を相続して3人の子供を育てながら以前と同じような豊かな生活を続けている。それは、例えば娘に高級ショッピングモール中原公司³⁰内に並べてある最も高価なハンドバッグを買ってあげたりする。また、それは今回の息子の誕生日パーティー兼従弟三造の歓迎会のために開いた祝宴からも窺える。

その宴会において、人々は名飯店の料理人を借りてきて作った饗応を食べ、装飾灯の下にレコードを聴きながらダンスを踊り、柔らかい椅子に座って雑談やカルタをしたり、中国情勢の話を楽しみに交流したりする。この宴会から、白夫人の生活の華やかさが明らかに見える。極めて内輪の宴会だが、白夫人は在留日本人だけではなく、中国人、朝鮮人、イギリス人なども招いている。そこには同じく上流社会に属し、享樂な生活に楽しむ白氏の早稲田出身の従弟の白崇礼や白家の旧知である混血児の劉煥東などがおり、海軍軍人のトムソンなどがいる。注目すべきは、出席者の日本人のほとんどが白夫人の援助を受けている苦勞人であることだ。ここでは、宴会に出席した森と小西の生活ぶりについて見てみたい。

ひどく気の弱そうな目と顔の大きい、そして背が低く胴の長い森は、20年近くも前に何の縁故もない白氏の家に転がり込んできた居候人である。子守が上手だったため、白氏の子供たちの世話をしながら、ほとんど人に気づかず、家具の一部になりきったように寄生している。そして4、5年前に裏町の骨董屋で偶然安く買ってきた仏像が、大したものだと分かった彼は、それを売りに東京に出掛け、人生初めて自分の腕で設けた500円を手に入れた。それは彼の久々の野望心を駆り立て、翌年も同じような仏

像を仕入れて上京した。しかし今度は無駄足だった。

一方、貧相な黒の背広を着た40がらみの小西は、3歳の女の子、5歳の男の子と妊娠8ヶ月の醜い妻と崩れかかった支那家屋に日本畳を敷いた胡同の裏通りの家で住んでいた。彼は日本人のために新聞を作る夢を持って白夫人から寄付してもらっている。しかし、いつも創刊号だけで終わってしまうなど、失敗を繰り返していた。このような生活がいつまでも続けられるという見通しもなく、今回こそ寄付金が集まったら満州へでも逃げ出そうと、彼は思っている。

森や小西のように、日本での生活が続けられなくなって、あるいは自分の手で商売をやりたいと憧れの地に渡ってきた人たちは当時多数いた。実際、北平在住の居留民の職業特徴や状況について、北京在住の居留民を管轄していた天津総領事館北平分署の1934年の報告書の中で次のように報告している。

内地人は爾來一千名を前後し所謂土着者と称する者大部分を占め、其の他、銀行、会社、新聞、通信員、病院勤務者、留学生等にして、一般商人と称する土着の者の内主なる商売としては売薬、古美術商等を始めとし、輸出入、請負業、雜貨及旅館等なるも就中売薬、古美術商等は比較的隆盛にして、其の他は余り振はず、唯辛うして現場を維持し居る程度に止り³¹。

このように、北京の居留民構成を見てみると、その大部分を占めるのはやはりサラリーマンである会社員、商売をやる個人経営者であることがわかる。そして、その警察署長の報告から実際当時の北平の居留民の商売がやっと生活

30 1926年に開業された中原百貨。当時天津初めてしかも最大のショッピングモール。

31 外務省亜細亞局「昭和九年天津総領事館北平分署警察事務状況（同警察署長報告摘録）」176頁。

を維持する程度のものであって、ほとんどうまく行っていなかったことが読み取れる。つまり、森や小西のように野望を持って何かをやろうとしたが、結局失敗した（成功できなかった）居留民が少なくなかったことだ。失敗を繰り返した末に、森のように白氏の家に閉じこめるか、小西のように寄付金を騙して北平から逃げ出すほか道がなかったのである。

以上、白夫人の宴会に出席していた二人の居留民について見てきたが、中島敦が彼らの描写を通して当時の文壇に言いたかったのは、知識人や文人たちが認識していた憧れの地、安らぎの場としての北京とは異なるもう一つの北京の姿ではなかろうか。

1930年代当時の北京、多くの居留民は自らの理想と相反する生活を北平で送らなければならなかった。そんな彼女らに対して、白夫人の生活は贅沢そのものだった。ほかの居留民に援助するほどお金に充足し、華やかな世界に暮らしていた彼女は、当時の在留日本人たちの憧れの対象であった。しかし、果たして彼女自身はその生活に満足していたのか。

3-2 墮落地獄に苦しむ

当初、白夫人は「愛には国籍がない」と信じ、中国人と偏見のないように暮らすことができると思い込んで北京に来了。実際、彼女もそれに相応する様々な努力を見せてくれた。それは、例えば彼女は中国籍をとり、中国語を勉強して話せるようになったことはもちろん、周りの在留日本人たちの中国人に対する偏見について、彼女は女らしくない言葉で以て揶揄して嘲笑し、中国人を庇う姿を見せていた。そして、これまで自分の中にある中国や中国人に対する差別意識に対して、彼女は「懸命な意志的な努力」や「必死な努力」をしてきたと言う。

しかし、努力したと告白しながら、白夫人は本当に心から努力したのだろうか。この点について、彼女の姑に対する態度からみていこう。

土地の豪家だった白氏の父親はずっと前に亡くなっていたため、白夫人の姑は実質的な家長として、多くの親戚達と夫が残した7人の愛妾たちと一緒に西安のある巨大な邸宅の中に住んでいた。結婚後、二人は郷里西安に戻らず北京で生活していた。そのため、嫁になってから白夫人は一度も姑と会ったことがない。結婚5年目に、白氏は「どうしても北京に出て来ない母親」に妻を合わせるために自ら妻を連れて西安に行ったのである。白氏は妻と母親が5年も会わなかった原因を「どうしても北京に出てこない」母親に責任を追い、妻を庇う姿が垣間見ることができる。では、白氏の母親は果たして日本人嫁に対して偏見と反感を持っているが故に、会いに来なかったのだろうか。作品では、二人が初めて会った時、彼女の息子の結婚に対する態度が次のように描かれている。

白氏の母親は、不思議にも、倅が日本人を妻にしたことについていささかの反対も唱えなかった。恐らくは息子に対する絶対的な愛と信頼とのためであったろう。彼女はむしろ親類たちの反対に対して息子の立場を支持していたぐらいであった。（150頁）

このように、白氏の母親は日本人の嫁を反対するどころか、あえて息子の立場を支持し、嫁を認めている。しかも、彼女は結婚して5年も挨拶に来ない嫁に対して、「いささかの反対も唱えなかった」。当時の西安と北京間の交通事情を考慮しても、嫁が姑に会いに行くのは当然のことである。

官吏の家庭で生まれ、女学校を卒業し知識を受けた白夫人が一般常識を知らないはずがない。新婚の時に挨拶に行かず、しかも5年後も自分が積極的に行ったのではなく、夫が仕方なく連れて合わせた事実から、白夫人は心の中で

は無意識に姑に対して一種の拒否があることが推測できる。彼女自身は、姑に対して「できるだけ敬愛しようと努めてきた」と言うが、もし本当にその通りであれば、中国に渡ったら真っ先に姑のところに挨拶に行くべきであり、たとえ姑に反対されても積極的に姑の好感をもらう努力をすべきであろう。しかし、白夫人は姑のために何かを努力する姿勢をまったくとらなかった。

前述のように、白夫人は中国人への偏見をなくそうとして「懸命な意志的な努力」や「必死な努力」をしていた。しかし、姑に対する彼女の言動を見る限りに、彼女は中国人と腹から溶け込もうとしなかったと言える。彼女はもう一度姑に会っている。その再会によって、彼女は自分の中にあった中国人への蔑視感情に気付かされるのであった。

その再会は、亡くなった夫の遺骨を持って財産整理のために一人で西安に向かった時だった。夫の遺骨を前にし、白夫人は姑と手を執り合いながら涙に咽せんだが、心の中ではどうしても「純粹に悲しんでいる」姑と同じ悲しみの気持ちの中に溶け合うことのできないものを感じた。この人間のもっとも原始的な喪失の感情さえ白夫人は姑と分け合うことのできない理由について、彼女は次のように打ち明ける。

彼女は姑をできるだけ敬愛しようと努めていたにもかかわらず、やはりなお彼女の心中には一点の傲岸さが姑を軽蔑し、姑との共鳴を防げようとしているのを彼女は発見しなければならなかった。それは決して無智や無教育への軽蔑ではなかった。その軽蔑は明らかに——彼女にはそう認めるのが辛くはあったが——人種的なそれに違いなかった。(150－151頁)

日本にいた時の白夫人は「愛には国籍がない」と言い、自分がほかの日本人達とは違い、中国人の中に溶け込んで、偏見と蔑視のないように暮らすことができると信じていた。しかし、中国に来て姑との接触を通して、彼女自身は認めたくないが、改めて自分の中に深く潜んでいる中国人への蔑視を気づくのであった。

そもそも白夫人が、「愛には国籍がない」と思っていたことや、ほかの中国人たちと溶け込むことができると思ったのは、彼女の周りが日本人の家族と、知識人の白氏やほかの少数の中国人留学生だけがいる環境の中にいた時である。つまり、彼女の中国像や中国認識は間接的で一方的なものであって、必ずしも現実そのものではなかった。

ところが、実際に中国で暮らし現実の中国に触れ、また自分の目で様々な中国人を見て接触することによって、それまで頭の中で築かれた虚構の中国像が崩壊されていった。北京に来てから「自分の立たされた苦しい立場」を感じた彼女の告白からも裏付ける。特に、愛する夫が亡くなったことによって、幻想がなくなり、現実の中国と対面せざるを得なくなった時、彼女の苦しみはさらに増していく。つまり、白夫人の中国人への蔑視や差別は、はからずも中国体験によって露呈されたと言えるのである。

それだけではなく、中国に暮らすことによって、彼女は改めて自分の日本人としての自覚、また中国籍になりながら帰属意識のない自分のおかしさに気づかなければならなかった。例えば、中国に来て日本語を使う環境と20年以上離れていても、白夫人は未だに日本語の本ばかり読んでいる。また、彼女は月を見ている時に、「月を見て悲しい物思いに耽るのが好きな日本人の血」が自分の体に深く沁み込んでいることを感じる。さらに、従兄弟の三造が自分のところに来るという知らせを受けると、幼年時代の雰囲気が現れて明るい気持ちになる。つまり、

彼女は日本人としての性質が自分の中に深く染み込んでいる事実気づきながら、一方で中国語への不自由さを感じており、依然として「椿」という字の発音もできないなど、中国への帰属意識のなさにも気づくのであった。

このように、白夫人は北京に暮らし、現実の中国社会と接触することによって、そもそも「愛には国籍がない」と説き、ほかの日本人達とは違って中国人と溶け込むことができると深く信じていた自分が、日本人としての性質が自分の体に深く染み込んでいること、また中国人への蔑視が芽生えたことを発見したのである。それに気づく彼女は、とうとう異国人と恋に落ち、異国に住むことに対する後悔の念が堪れなかった。

自分が、そんな大それたことを、異国人と恋に落ちて、その異国に住むようになるなどという様な冒険をするわけがないではないか。そんな、考えてみただけでも恐ろしいことを。あれはみんな夢だったのだ。自分はそんな恐ろしいことをするような悪い子じゃない。(中略) 悪夢と思っていたことはやはり現実だったことに気がつく。言いようのない嫌悪の情を以って、彼女の周りを十重二十重に取り巻いている現実の絆の厳しさが彼女の全身を振るわせる。自分はどうしたってそこから逃れられるものではない。(149頁)

このように、白夫人は中国人と結婚し中国に住むことを「冒険」「恐ろしいこと」「悪夢」といい、自分を「悪い子」と言う。異国人と恋に落ち、異国に住んだからこそ、彼女は自分の中にあった中国人への差別感情に気づいた。それはまさしく恐ろしい悪夢にほかならない。当初、周りの在留日本人たちの中国人蔑視に対し

て女らしくない言葉で揶揄し嘲笑していた白夫人は、彼らと少しも変わらない自分のことを意識しなければならなかった。彼女は自分の体にある異国人を蔑視し差別する悪い子の存在を見出したのである。もし白夫人が異国人と恋に落ち、異国に住まなかったら、彼女は中国人を蔑視し差別する悪い子にはなっていなかったであろう。しかし、いま彼女がどんなに後悔しても昔に戻るわけにはいかない。

このように白夫人の世界は崩れていき、墮落の道へと走っていく。自分の暗闇にいる心を救うために、彼女は伝吉を情夫にし、彼との肉体関係に執着した。しかし、そのような行為が意味のないのだと認識する。そして、長女の麗美と伝吉が関係を持っているという事実を知ることにつれて、彼女の精神世界はさらに狂っていく。結局、彼女は「自分にはもう何もわからないと思う。もうなにかもがめちゃくちゃだと思われてくる。地獄だ、地獄だ、と覚えず声にまで出」して叫ばずにはいられない救いようのない世界に陥ってしまったのである。

以上見てきたように、本節では上流社会に暮らす白夫人と彼女を取り巻く周りの在留日本人の分析を通して、北京という空間が必ずしも当時日本内地で宣伝された憧れの場所ではなく、精神的にも物質的にも理想とはかけ離れた生活を送る在留日本人が彷徨する場所であることを浮き彫りにすることができた。

(次号につづく)

謝辞

本稿を執筆するにあたり、丁貴連先生から有益なご指導を頂きました。この場を借りて御礼を申し上げます。

参考文献

中島敦『中島敦全集3』（筑摩書房、2001）
芥川龍之介『芥川龍之介全集8』（岩波書店、

- 1996)
- 阿部知二『北京』（第一書房、1938）
- 一戸務『現代支那の文化と芸術』（松山房、1939）
- 上田万年「清国留学生に就きて」『太陽第4巻第17号』（博文館、1898）
- 王玉珊「中国人日本留学の歴史問題について」『中央学院大学社会システム研究所紀要10（2）』（中央学院大学社会システム研究所、2010）
- 外務省亜細亜局「昭和九年天津総領事館北平分署警察事務状況（同警察署長報告摘録）」
- 外務省外交資料館「在本邦清国留学生関係雑纂」
- 勝又浩「解題」『中島敦全集3』（筑摩書房、2002）
- 川村湊「帝国に抗する力を表現した作家」『中島敦生誕100年、永遠に越境する文学』（河出書房新社、2009）
- 川村湊「中島敦伝 第4回 北方彷徨」『アイ・フィール15（2）』（紀伊国屋書店総務部、2005）
- 菊池秀明『ラストエンペラーと近代中国清末中華民国』（株式会社精興社、2005）
- 北川桃雄『古都北京』（中央公論美術出版、1969）
- 田中益三「遍歴・異郷－朝鮮・中国体験の意味」『中島敦 昭和作家のクロノトポス』（双文社出版、1992）
- 東京高等商業学校東亜倶楽部『大正中国見聞録集成「中華三千里」』（ゆまに書房、1999）
- 徳富蘇峰『大正中国見聞録集成「支那漫遊記」第8巻』（ゆまに書房、1999）
- 中村光夫「中島敦論」『中島敦全集別巻』（筑摩書房、2002）
- 濱川勝彦「「虎狩」まで」『中島敦の作品研究』（明治書院、1976）
- 平林文「中島敦『北方行』の研究—その成立と構成と撤退—「ノート第一」と『北方行』と『狼疾記』—」『高崎商科大学紀要（27）』（高崎商科大学、2012）
- 劉建輝『魔都上海 日本知識人の「近代」体験』（筑摩書房、2010）
- 林語堂「古都北平」『改造』「支那事変増刊号」
- 渡辺一民『＜他者＞としての朝鮮 文学的考察』（岩波書店、2003）